

## プレハーノフについてのレーニンの評価

### 三五二 新聞『トルドヴァーヤ・プラウダ』 編集局への手紙から

……すぐれた労働者プラウダ派のあいだに調停主義の傾向があり、彼らのひとり——マリーニンとかいう名の人——が、このことについて、新聞の寄稿者である、文筆家のエム・エヌ<sup>(1)</sup>と大いに話し合ったというのは、ほんとうだろうか？ これが一つの流派であるのかどうか、どんな流派なのか、問題はなにか、彼らの統一条件はどんなものか、それとも、これは個人で、たまたまおきた出来心なのかどうかを知ることは、きわめて重要である。

『エヂンストヴォ\*』におけるプレハーノフについては、至急つぎのような論調をとる必要がある。すなわち、彼は、日和見主義やベルンシュタインや哲学的反マルクス主義との闘争では絶大な功績のある偉い理論家であって、1903 - 1907年の戦術上のこの人の誤りも、1908 - 1912年の混乱期に彼が「地下運動」をたたえ、彼の敵や反対者を暴露するさまたげにならなかったが、その彼も、いまでは、残念ながら、ふたたび自分の弱い面をとりもどしつつある。彼の思想のまったくの不明瞭は、たぶん、一部は、彼がまったく事情に暗いところからきているのであろう。そして、この不明瞭さは、彼が、だれとどんな条件で統一をのぞんでいるのか、ナロードニキとか（『ソヴレメンニク』を見よ、そこではすでにギンメル氏らが彼の名まえをひけらかしている）、それとも『ナーシャ・ザリヤー』の解党派やポトレソフ氏とか、という点にある。そこで、こういう質問を出して冷静にこう声明すべきである。読者は、これらの当然の質問にたいする明瞭な回答をおそらく待ちおおせないだろう。なぜならほかならぬこれらの質問が、プレハーノフにはつきりしていないことは、文献からみてわかっているからである、と。

もう一度、お元気で。大成功をお祝いしよう（一にも二にも経営だ!!!）。ごきげんよう。  
『プーチ・プラウドィ』の寄稿者

ウィーン大会まえに新聞の調子を変える必要がある。闘争の時期がやってきた。全力をつくして群小グループの破廉恥漢をうちまかし、組織を攪乱しようとする彼らの企てを容赦なくくいとめよ。彼らは、あえて五分の四\*\*を分裂させようとしている。われわれの意見が一致しているか、諸君はいつ出すのか、ひとこと書いてよこしたまえ。

解党派にも、群小グループにも、すぐにできるだけ強烈な攻撃をくわえる必要がある。四万人が、われわれの強硬な意見を知るにちがいない。われわれの義務は、冒険主義者を嘲笑することである…… 注) ……は本文中の表記。

\* 『エヂンストヴォ』（『統一』）

1914年5月から6月にかけてペテルブルグで出た合法新聞、党維持派メンシェヴィキと調停派ボリシェヴィキのグループによって発行されていた。本全集、第41巻、678ページの該当注を参照。

\*\* 五分の四 『プラウダ』を中心に結集していた、先進的労働者の五分の四という意味。

(1) ボクロフスキー、エム・エヌ（ドモフ）（1868 - 1932年）

1905年からボリシェヴィキ党员、著名なソヴェト国家活動家、社会活動家、歴史家。反動時代には召還派、最後通

牒派、ついで反党「フペリョード」グループに加盟。第一次大戦中は中央派の新聞に寄稿。1917 - 18 年、モスクワ・ソヴェト議長。しばらく「共産党左派」に所属、ブレスト講和に反対。1918 年からロシア共和国教育人民委員代理。のち共産主義アカデミー、ソ連邦科学アカデミー歴史学研究所などを指導。

第 43 卷「新聞『トルドヴァーヤ・プラウダ』編集局への手紙から」P 502-504

1914 年 6 月、18 日以後の執筆

ポロニノからペテルブルグあて

手稿によって印刷